

# 文書館だより

第2号

昭和59年1月

## 天明三年浅間山の噴火

史料紹介をかねて



一 歴史上の天明三年浅間山噴火の特色

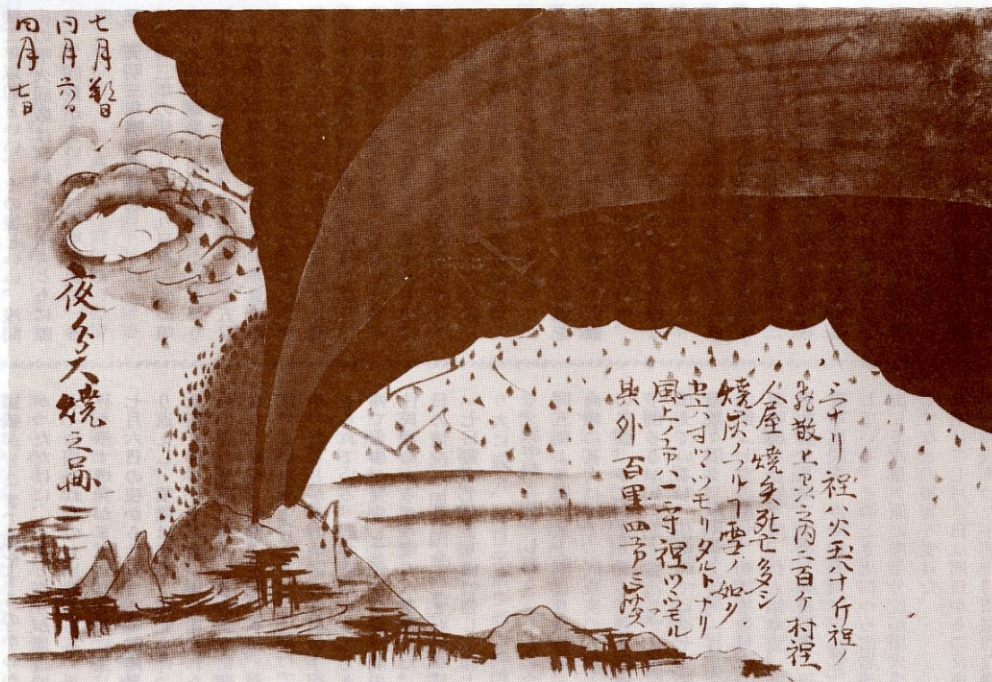
天明三年七月八日(新暦八月五日)の溶岩流火砕流によって、わが国火山活動中最大と称される浅間山噴火は多くの特色をもっている。(一)四月九日より活動期に入り六カ月にわたったこと。(二)日を逐つて激烈を加えていったこと。(三)噴煙による礫砂灰が農業最盛期に壊滅的打撃を与えたこと。(四)溶岩流火砕流が吾妻川と利根川に流入し、泥石流による災害をもたらしたなどである。浅間山はわが国三大活火山の中でも最も若い火山であり、その位置が最も海に遠いことから被害区域が広汎に及び、被害も甚大に

群馬県史編  
さん委員 萩原 進

なつた点があげられる。

次に噴火史の記録文書の多いことが目につく。他の桜島や阿蘇山、宝永四年の富士山爆発、磐梯山、焼岳、伊豆大島など大噴火が頻発しているが、当時の状況や経過を知る文書や記録は天明三年の浅間山に比ぶべくもないほど少い。その理由については後に述べることにするが、関係資料が圧倒的に多く書き遺されたことは日本火山史研究の上に大きな意味をもっていると言える。

さらに、天明三年の浅間山噴火は地球物理学や火山学の上からのみでなく、近世史における政治、社会、産業経済、文化、土木、交通などを探る多くの手がかりを与えてくれる。ことに最近の気候学で異常気象の有力要因と見られる火山の噴煙と地球上の冷害などが問題になって



「夜分大焼之図」(浅間園模写本、小諸市 美斉津洋夫氏所蔵)



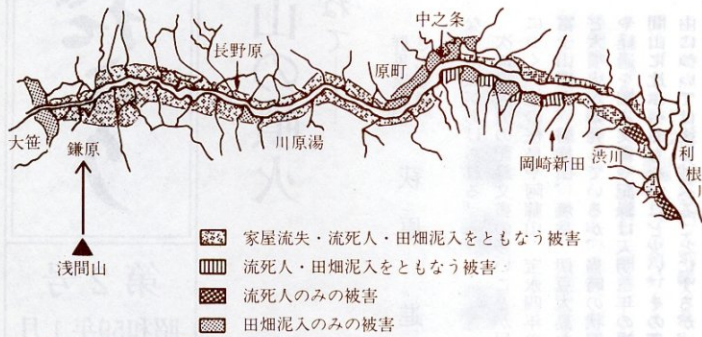
いるが、近世の三大飢饉の一つ天明飢饉と火山爆発について当時の多くの人の手によって書かれた手記が今後解明されるべきであるものと思われる。

## 二 天明三年前後の噴火活動

浅間山の噴火は有史以前の古い時期から開始されてきたが文字もなく記す人もいないとき古い記事は「日本書紀」の天武天皇十四年(六八五)の条に見える「是の月(三月)信濃国に灰霽り草木皆枯れぬ」であるが、これとても果して浅間山かどうか明記してないが先ず浅間山の記事として誤りはあるまい。次に最も確かな記事は中御門右大臣藤原宗忠の日記「中右記」である。これには天武天皇紀より四二三年後の天仁元年(一一〇八)に上野国司からの報告書を写したとして、七月二十一日麻間峰より猛火山嶺を焼き、砂礫が国中に満ち田畑が滅亡したことを伝えている。このときの火山礫層は古代史や考古学の絶対年代推定の上にはしばしば引用され、日高遺跡や女堀開墾の時代考証に役立つ。

鎌倉時代の弘安四年(一一八二)も大きな噴火があり、北麓六里ヶ原に溶岩流が流下したと伝えられる(信濃国の野史)が、その後もしばしば活動をし、近世に入るとかなり詳細に記されるようになるが、天明三年のような猛烈で大規模のものではなかった。天明三年のときに、鎌原村の鎌原村民をはじめ連続爆発の恐怖の中にあっても、溶岩流の流出のある

ことは一人として予測する者がなく、ただ上空からの火山礫などの降下のみを心配して、みな土蔵に入って沈静を待っていたとあるのを見ても、弘安四年の際に溶岩流が逆出したことは伝承さえされていなかったことを思わせる。もし予め噴煙の降下物被害のみでなく火口からの溶岩流出を知っていたれば鎌原村の惨事ももっと防げたと思われる。とにかく、天



吾妻川沿い村々浅間焼け泥流被害概況図 (群馬県史 資料編11 解説より引用)

明三年以前といい、その後といい、浅間山の噴火回数は阿蘇や桜島とともに際立つて回数が多い(『日本地震史料』参照)。

## 三 天明三年噴火の経過

天明三年の活動は四月九日第一回の噴火があり、爆発音地震鳴動火山雷を伴う烈しいものであった。小噴火のあと五月二十五日より再び活発となり、多量の砂と灰を連日上州側に降らした。これで沈静するかに見えたが六月十八日にまた噴火がはじまり、前よりさらに強くなり、日一日と悪い状態へ加速して人々は不安におののくようになった。地元の手記に同(六月)廿八日昼も近辺へ砂降り、同日夜の九ツ時(午前零時)大地震頻りに動き鳴りたち、黒煙り已前よりつく山の中より電出る事しきりなり。各々身もよだて、見る者汗を流し魂を失計なり。此夜は岩下(吾妻町)沢渡り辺へ砂降り、是より相続き毎日焼、地動き障子にひびき、さびしき有様なり。

と伝えている。諸記録ともこの頃から最も緊迫した字句を用いてその凄絶不気味な活動を描写し、写真図などにも六月二十八日以後の日付で噴煙を描写しているものが多い。山麓を遠く離れた伊勢崎藩の関重慶の『沙降記』も六月末からことに詳しく記録しているのを見ても遠方まで手にとるよう感じたことを示している。七月に入ると一層活動は強まり、連続爆発状態に入った。涯知れない自然の

猛威がどこまで激化するのかわからなかつただけに、不安と焦りが周辺地域の人々に抱かれたのも当然である。その限界を示す爆発がまず七月七日に生じた。七月六日の夜から休みなく鳴動爆発をくり返えし、噴煙は焼石、電光を伴って中天高く昇り、その厚い煙に覆われた関八州は忽ち皆既日食のときのように闇夜となり、高崎、前橋、足利、本庄、深谷、江戸まで昼間提灯なしでは通行できなかったことがその地区の住民の手記に伝えられている。軽井沢宿はこのとき火山弾で火事が発生して民家多数が焼失し、住民は命からがら南方へ避難した。この日の情況は加賀国金沢藩の記録にさえ「七日寅の上刻より山鳴強し、卯上刻より大に強く、先日来無之程の鳴動甚響く。辰中刻より少し弱く、午上刻又強く、同五刻より弱く未上刻より又強く、黄昏尚頻に甚大に強く、同夜亥の五刻より殊の外強、子二刻より弱く、強き節は戸障子倒るるが如く家々響冷し」(政隣記)と伝えているし、伊勢崎では「七日暁方霹靂数々隕ツ。震動益々甚矣。日肝如暗夜。佳節(七夕の節句)朝拝挑燈見之。終日雷鳴段々沙益々隆。行人傾傘笠。同夜三更地震太甚矣。屋舎乍如将顛覆。迅雷霹靂電尾閃奔、沙降如暴雨」(沙降記)と記している。このとき火口から溶岩流が流出して六里ヶ原の南半分が山火事を起こすなどの被害を受けた。

明けて七月八日は前日からの反復爆発が一時収まった午前十時頃猛烈な爆発が



起こり「直に熱湯一度に水勢百丈余り山より湧出し、原（六里ヶ原）一面に押出し、谷々川々を押し、神社仏閣民家草木何によらずたつた一おしにおつぱらい其跡は真黒に成」（地元民手記）とあるように火口から多量の熱湯が岩石とともに一気に上州側に流下し、鎌原村を二瞬の裡に埋没し、さらに吾妻川に流れ込み、川の水の一つになった巨大な泥流と化した。このあとに現在の鬼押出しのあの想像を絶する溶岩が流出した。いかに自然のエネルギーの大きいかがわかる。火山から熱湯がなげ流出したか今もつて謎であるが、一説には山腹にあつた柳の井とよばれた池沼の決潰と言われるがこの池沼はそんな大きいものではなかつたらしいのでそのまま信じ難い。埋没した鎌原村はそのとき「此日は天気の殊の外吉故川押（洪水）有べき用心少もなく、焼石ふるべき用心のみ致し、各土蔵に諸道具を入、倉に入昼寝致し居、油断最中おもしろいの外にたつた一押しに押流」（地元住民手記）された。

全滅は鎌原村のみではなく、西窪村芦生田村も殆んど埋まり、長野原宿も昭和三年警察署の地下室工事の際に七メートル下から家具調度品などが発見されたことからも見てわかるが鎌原村より深く眠つてゐることが元村。泥流は五十八年十月三日の三宅島の泥流とは比較にならない。先日渋川市中村でこのとき泥流ともにも流着した石を掘つたところ十二メートル十一戸という家位の巨岩であつた。こういう巨岩大石を巻き込んで流下した。原町あたりでは高さ三丈（九メートル）以上で山のような黒いものが通過するまで四時間位だったという（浅間記）からいかに想像を超えるものだったかかわかって沿岸村々を冒して流下した。死者推定千数百人へのほつた大惨事である。噴煙の流れた上州の碓氷・甘栗・群馬・佐位・那波・新田・邑栗郡をはじめ、武蔵まで降つた礫（軽石）火山砂火山灰で農作物の全滅、道路交通の杜絶、用水の閉塞などこれまた被害甚大であつた。全く静穏に帰したのは翌年一月である。この第一次災害だけではなく、長期に互る噴煙が成層圏に達したため、火山塵による洋傘現象を起こして地上は冷害となり、二次災害の天明飢饉をもたらし、このための飢死は莫大な数に上り有史以来日本火火山災害史上最大の惨事となつた。

#### 四 資料について

天明三年浅間山噴火資料は冒頭に記したように実に多い。これは事件そのものが大規模であり長期的に被害の実体が稀に見えるものであつたから各方面で記録したためであるが、一つには当時すでに武士僧侶などの知識層のみでなく、地方の庶民階層が読み書きできるよつたになつてゐたことがあげられる。地域別に記された文書・記録は徹底的にこの噴火を分析する上に貴重である。では分類するとどんな資料があるかを表記してみよう。

- (一) 日記類 前橋藩主であつた松平氏の「藩日記」（前橋市立図書館蔵）「小諸藩日記」関重疑の「沙降記」金沢藩日記類、森山孝盛「自家年譜」など。
  - (二) 有識者の手記 根岸九郎左衛門の報告書、杉田玄白の「後見草」、常見一之の「天明浅獄降記」井出貞川「天明信上変異記」佐藤降記「天明雑変記」高橋道齋「浅獄放火記」など。  
（根岸九郎左衛門の報告書 千葉県 小笠原氏所蔵）
  - (三) 地域別記録 大笹村黒岩長左衛門「浅間山焼一件」菅原村長左衛門「浅間山大焼一件記」原町富沢久兵衛「浅間記」宇田村横田重秀「浅間焼見聞実記」三巴亭「浅間獄焼記」三島村大武山義珍「浅間山大変記」総社町三雲源五右衛門「浅間焼砂一件記」草津魚柵「浅間山大変記」など多数。
  - (四) 隨筆・紀行・詩文 羽鳥・紅「文月浅間記」平沢旭山「吾妻川焦石記」大田蜀山人「一話一言」根岸鎮衛「耳袋」橘南谿「北窓鎖談」松代藩士「夢中三湯記」など。
  - (五) 文書類 当時集録したものでは松浦静山の「甲子夜話」がある。そのほか群馬県史資料編の近世編、各郡誌・町村誌、三井文庫、東大地震研究所、小諸市美齋津洋夫氏など各方面で所蔵。
  - (六) 金石文 犠牲者供養碑を含めると県内東京都など二十基近い。（雑誌「群馬歴史散歩」第48号参照）
  - (七) 瓦版 美齋津洋夫氏、東大地震研究所浅間山観測所所蔵などが著名。
  - (八) 絵図類 各記録に添付したもののほか、数種が判明しているが、図録として一本にまとめる価値がある。
- 以上主な資料のみを掲げたが、一部天明三年浅間山関係記事の文献資料に及ぶときその点数はまことに多い。

#### 五 終りに一お願い

以上思いついたまま二世紀前の天明三年浅間山噴火史を略述したが、目下史料集の仕事を進意進めようと思つて、完成できれば些少は参考になるやうと思つて、独力で牛歩のような進行状況ではこの大災害史料集も覚束ない。ぜひ各方面の資料提供を心からお願ひしたい。（五八・十二・五稿）



# 収蔵文書の現況

## 古文書 (二)

### 古文書の寄託について

文書館では、古文書の寄託を受け付けています。古文書を御所蔵で、保存や取扱について困っている方、或は古文書を広く研究等の利用に供したいと思っている方は、是非当館へ御寄託下さい。

寄託とは、古文書を文書館へ預け、整理、管理等を文書館へ任せることです。古文書の所有権には何ら変更ありません。事情により返却の希望があればいつでも解約返却することができます。

保管料、手数料というものは一切無料です。

お預りした古文書は、家別に整理を行い、目録を作成して一点一点間違いないように管理します。保管は、空調・安全設備の完備した書庫で行います。また家別に順次分類して、分類目録を印刷発行いたします。

寄託の手続きは、寄託申込書と寄託契約書を作成するだけです。詳しくは文書館(前橋市文京町三二七—二六 電話〇二七—21—二三四六)古文書課まで御連絡下されば、御説明いたします。

なお古文書の寄贈も勿論受け付けています。寄贈された古文書は、県の備品として永久に保存されます。

貴重な文化財としての古文書の保存と活用に皆様方の御理解・御協力をお願いいたします。

収蔵古文書一覧 (その2)

請求番号	寄託・寄贈者	住 所	点 数	備 考
8201	黒 沢 一 郎	藤岡市高山	162	近世文書、村方一般、訴訟文書等
8202	坂 本 計 三	藤岡市高山	13,587	近世・近代文書、村方一般、炭商売関係、近代文書多数
8203	横 山 雄二郎	群馬郡群馬町中泉	2,177	近世文書、諸願書・証文類
8204	林 成 一	利根郡昭和村生越	419	近世文書、年貢関係、秣場出入書類
8205	黒 沢 丈 夫	多野郡上野村乙父	2,773	近世文書、土地・年貢関係、酒造関係
8206	小此木 千代子	藤岡市下日野	1,055	近世文書、土地・年貢関係、村公用日記
8207	栗 崎 友 康	藤岡市下日野	239	修験関係
8208	鈴 木 順 一	利根郡利根村日陰南郷	589	近世・近代文書、村方一般、明治前期村政、繭売買
8209	前橋市新堀町自治会	前橋市新堀町	123	近世・近代文書、土地関係、浅間焼被害
08210	近 藤 章	高崎市捨物町	1	人別改帳
08211	井 上 清	多野郡吉井町馬庭	2	養蚕教材
08212	上 岡 高 行	伊勢崎市波志江町	154	安中領嶺村、南牧領村方文書
8213	神 戸 金 貴	甘楽郡下仁田町本宿	11,898	西牧領割元名主文書、酒造、西牧関所関係
8214	飯 塚 馨	多野郡鬼石町三波川	13,736	山村村方文書、残存度大
8215	大胡町上大屋区	勢多郡大胡町上大屋	1,052	近世・近代文書、村方一般、千貫沼用水、明治期村政書類
8216	高崎市根小屋区	高崎市根小屋町	1,714	近世・近代文書、村方一般、明治期以降村政書類
8217	山 田 松 雄	多野郡鬼石町譲原	2,878	近世文書、村方一般、継続残存
8219	岡 部 市 弥	北群馬郡榛東村新井	269	近世文書、村方一般、三国道交通関係
8220	赤城村第五区	勢多郡赤城村敷島	1,116	近代文書、山林土地関係
8221	〃 第七区	〃 長井小川田	92	近代文書、村政書類
8222	〃 第八区	〃 長井小川田	56	近代文書、村政書類
8223	〃 第九区	〃 深山	199	近世・近代文書、村方一般、耕地整理



## 新収蔵文書紹介

### 古文書

本年度もたくさんの方々から古文書が寄贈・寄託されています。現在「収蔵古文書一覽 その2」に掲載したもののほか次の文書が寄贈・寄託され順次整理を進めています。

種別	氏名	点数
寄贈文書	市部 3点	1冊
	川京 253冊	5冊
寄託文書	徳進町会雄 465点	354冊
	正 京治光 253冊	26冊
	井原市目 英 役 郁富益岩 211冊	80冊
	鈴北前丁田 黒赤秋漆高 速中 257冊	
	雄場 満子 雄男 雄	
	見村 島玉 見村	
	見村 島玉 見村	
	見村 島玉 見村	
	見村 島玉 見村	
	見村 島玉 見村	
	見村 島玉 見村	
	見村 島玉 見村	

### 速水家文書

昨年一〇月二七日埼玉県越谷市在住の速水益男氏より、群馬県製糸業の歩みに関する貴重な資料を含む文書が寄託されました。

この中で特に注目されるのが、日本最初の器械製糸所（前橋藩営製糸所）の設立、富岡製糸場の建設、同場長に就任するなど、製糸業の発展に貢献し、本県のみならず全国にその名を知られた速水堅曹（一八三九〜一九一三）の日記です。益男氏は堅曹の孫にあたります。日記は一六六ページにわたり、「速水堅曹履歴抜萃 甲号 自記」と題が付されています。

ます。一八七〇年六月

から七月にかけて、スイス人の製糸技術者ミューラーが来県し、指導を受けるとともに伊香保や下仁田など県内各地を見聞したことが、前橋藩営製糸所が完成したことが詳しく記されており、本県製糸業の歩みを知る上で重要な資料といえます。



明治9年フィラデルフィア万国博覧会糸審査官を勤めたときの堅曹

以前からいわゆる「速水堅曹自記」の存在は知られていたものの、所在がつかめませんでした。ところが昨年県史編纂室の調査でそれが明らかになるとともに、関係の方々のご協力により寄託されることとなりました。文書館では、この日記をはじめとする速水家文書を、なるべく早く皆さんにご覧いただけるように現在整理中です。



「速水堅曹自記」の一部

## 新収蔵文書紹介

### 行政文書

今年も県の各機関より行政文書を受け入れました。これらの行政文書は、かび・虫害をなくすためくん蒸し、荒仕分をした後書庫に排架しました。現在登録簿を作成しています。受け入れた行政文書は次の表のとおりです。

#### 昭和五十八年度管理受任等一覽

受託	引継	管理受任	
		総務部	企画部
総計	公立学校共済群馬支部	農林部	六〇冊
		農民生活部	五七九冊
一、七六二冊	三七冊	農政部	九冊
		林務部	一〇五冊
五六三冊	一、一六二冊	土木部	九六冊
		出納局	二五九冊
七冊	七冊	議会議事室	四七冊
		小計	七冊

大正期行政文書一覽 (冊数は分冊後)		
類名	冊数	
令達	63冊	
議事	47冊	
人事	18冊	
統計	201冊	
庶務・秘書	33冊	
租税	209冊	
会計(予算)	172冊	
地理	44冊	
戸籍	3冊	
通信・運輸	1冊	
皇室・來賓	23冊	
兵(軍)	31冊	
宗教	98冊	
福祉	57冊	
土木・河川	153冊	
勸業	250冊	
学務	387冊	
建築	14冊	
法務	31冊	
郡市町村(地方)	395冊	
雑款	37冊	
合計	2267冊	



大正期行政文書の閲覧開始について  
昨年来補修製本・整理分類を進めておりました大正期の行政文書が本年一月より閲覧できるようになりました。大正期の行政文書は原簿冊にして一、一三二冊です。その概要は大正期行政文書一覽のとおりです。  
行政文書も大正期に入ると万年筆で書かれたものや印刷されたものが多くなり洋紙が使われるようになっていきます。  
第一次世界大戦、米騒動や関東大震災の発生など、大正期の県内の政治・経済・社会の様子を知ることができます。  
(閲覧を開始した大正期行政文書の一部)



# 高崎市下滝天田壮家文書

文書館専門員 駒形 義夫

天田家文書は昭和五十六年九月、高崎市下滝町天田壮氏から群馬県教育委員会（県史編さん室）を通じて県立文書館に寄贈されました。寄贈に先立ち昭和五十二年には県史編さん室が調査を実施し、「群馬県史」資料編10に一部史料がとりあげられています。

文書を伝存した天田家は江戸時代群馬郡下滝村、現高崎市下滝町にあります。下滝町は市の東南に位置し、利根川の西方、滝川と井野川にはさまれ、町の東部を関越自動車道が通っています。

この地は江戸時代初頭には高崎藩領（安藤氏に属し、慶安二年（一六四九）から前橋藩領（酒井氏）にかわり、延享四年（一七四七）からは幕府代官領となりました。この付近は、平坦地で水利にも富み地味豊かな土地であったようです。江戸時代の村高をみると寛文八年（一六六八）には六三三石とあり、利根川流域の標準的規模の村といえます。寛延二年（一七四九）の『下滝村明細帳』によると村高五九五石余、百姓家数七九軒、稲作の他に麦、あわ、ひえ、いも、大豆を作り、桑をわずかながら栽培していたとあります。

文書が伝存されていた天田家は村の名主を勤めていました。いつごろから名主

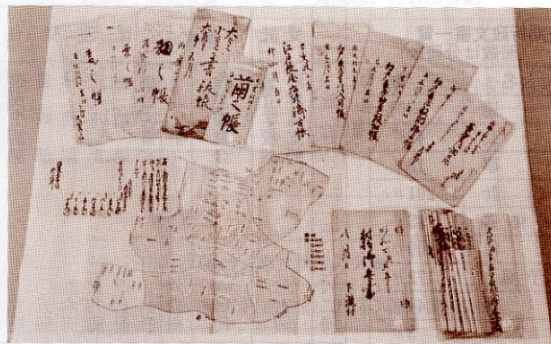
となったか今のところ確められていませんが少なくとも元禄期以前から村の中心的な立場を保持していたと思われます。寄贈された約三千点の文書の大部分は一般の名主文書ですが、その他に、天田家の地主、商人としての側面を示す史料もかなりの数ふくまれています。たとえば、天田家が寛政七年（一七九五）に江戸日本橋で貸屋経営にあたった二十余年間にわたる関係史料です。家賃収納、町役員担等の経営史料とともに長屋設計絵図面等も残されており、建築史、職人史を考えるうえでも貴重なものといえます。

また普請関係史料と関連して、長屋の建築用材の木材・瓦・家財道具の江戸廻送がどう行われたかを示す利根川舟運に関連する文書も残されています。

このほか凶年時の窮民救済、とくに天明三年（一七八三）浅間山噴火後の隣村矢中村の手余耕地起し返し（再開発）や、植野天狗岩塚の普請関係記録も残されています。（群馬県史研究）11「西上州一在方商人の江戸長屋経営」の中で井上定幸氏により貸屋経営と窮民救済等の天田家史料の紹介がされています。

なお、寄贈された天田家文書については本年二月に本館展示室で展示公開の機

会を持つとともに、文書館目録第二集として文書内容が紹介できる予定です。



写真は、天田家文書のごく一部です。

江戸長屋経営関係資料の「長屋普請調日記」「収納揚方帳」「長屋勘定改控帳」「長屋普請出入書附」「店買濟方帳」「家賃収納金濟方出入書附」などができます。「繭の帳」を詳細に知ることができます。「繭の帳」「大豆・小豆・大角豆書拔帳」や桑・柵・麦の諸帳簿からは農業経営の規模、生産物の集荷、市場出しなどの方商人の側面も浮かぶことができます。そのほか、起し返しなどの絵図類や、一般村方文書もみることが出来ます。

## 利用者の目



初級古文書解説講座を受講して

山本元治

六十路の手習、恥かしい思いで行ってみたら、それも取越苦労で案外加齢者が多いのでほっとしました。古文書なるものを初めて手にし、何人とも要領を得ず当惑するばかり。それでも、回を重ねるに従って先生のご指導よろしきを得て着々と其の成果があがる様になりました。こうなると、文書の内容に好奇心がわいて、次回の宿題をもらうのが楽しみになって来ました。ひまをみては辞典を頼りに解説作業、書いた人それぞれの癖があり、なかなか難しいが其の反面楽しみもありました。文書の中にどうしても解らない字がいくつかあつて苦労しました。何事でも習うより馴れるで、昨今は異なる文書を数多く読んで馴れる心がけています。これからも続けて勉強し豊かな心を養いたいと思っています。

先生を始め皆様方のよきご指導のおかげと深く感謝いたしております。

高見沢 保

「寛一金拾両也」今なら読めますが、古文書講座一日目。渡された資料はナメクジの這い跡の様で何と読むのやら、その日は忙しく先生の読むのを目で追うのが精一杯。帰って資料を眺み、思い出し



# 明治初期御巡幸関係文書

文書館嘱託 横山伊平

「一八八一年(明治一四)を頂点とし行幸がさかんにくり返された。中でも大巡幸は、地方の人々の間に天皇に対する尊崇の意識をもたせることになった。一方農村では(中略)養蚕・製糸・製茶などによって、家や村の繁栄と富国を結びつけようとした。下略」(高校日本史行幸と地方社会 清水書院)

この小單元に関する生の資料が本館所蔵明治期行政文書の中にあります。これらにより本県御巡幸の様子を具体的に知ることが出来ます。

## 一 明治一一年御巡幸の概要

- 5月23日 御巡幸下達(来ル八月北陸東海両道各県御巡幸旨被仰出候。)
- 7月2日 御巡幸御休泊割下達 御道筋宿駅区戸長等へ地方官心得下達
- 7月20日 地方官心得書第二号通達。
- 7月30日 林内務少輔来県 御巡幸に付き下検分打合せ。
- 8月30日 板橋発輦。
- 9月2日 新町駅行在所着輦 県令奉迎・供奉 古器物・書画天覧 宿泊。
- 9月3日 屑糸紡績所臨御 岩鼻橋板輿渡御 倉賀野宿小休 高崎駅行在所中食
- 日高村(現高崎市)小休 内藤分村(現前橋市石倉)より板輿渡御 前橋行在所(現臨江園)着 宿泊。



- 9月4日 管内山川写真天覧 県治概略言上聴取 医学校・師範学校・座練製糸場等臨御 曲輪橋板輿渡御 日高村小休 高崎駅行在所着輦 宿泊 花火天覧。
- 9月5日 陸軍鎮台管所練兵天覧 板鼻駅・原市小休 松井田行在所着輦 宿泊
- 9月6日 長野県令天機伺 五料村・坂本宿・栗ヶ原村小休 峠町において県官一同奉送長野県へ。
- 9月17日 東京帰着。

## 二 御巡幸関係文書の概要

御巡幸は、地方官心得書的主旨にそって行われ、所蔵簿冊の内容もこれに従った記録や下達、照会、上奏、進達等です。  
〔御巡幸一件〕一九四六一/3/3/3  
三六件 県下学校教育普及状況上奏文  
就学生徒数及学校寄附金表 天覧生徒作  
(官省御達往復留 一九四九 号より)

品提出者名簿 天覧授業案及授業参加生徒調査 御巡幸沿道各所学校奉迎場所及生徒職員名簿 その他 学制頒布以来五年間の本県御巡幸沿道近辺宿駅村々の教育普及状況を知ることが出来ます。

〔御巡幸(上奏書)〕一九四七 五二件  
孝子節婦篤志力田賞与済人名 勸業之法(養蚕・製糸、銀行、農事試験場、抗業、土族就産等) 古昔義人烈士墳墓并事蹟 群馬県警察功績表 産業ニ関スル諸表 その他 維新後一〇年間の本県々勢(政)を知ることが出来ます。

〔御旅宿関係〕一九四八 二七件  
前橋町御宿割 松井田駅宿所割 御門鑑渡帳 御門鑑渡人名控書 供奉官及随行員の宿泊状況等がわかります。

〔官省御達往復留 附御先発官回答書〕一九四九 一/2/2/2 一八二二件  
御巡幸にかかわる交通条件整備や行在所御小休所の整備・接遇、奉迎心得・人民の対応等の諸問題が下達、照会、回答、進達の形で詳細に打合わされています。  
〔雑記〕一九五〇 二五件  
人力車人足等取揃方達し書類 御巡幸費計算参考書 本県御巡幸庶務係の様子があります。

〔諸請書留〕一九五一 1/2 1/2  
2 三八八件  
御巡幸御用達請書 御下賜金品請書その他 各地区住民の協力の情況がわかります。  
以上教材の一つとして紹介します。

思い出し見当つけて読んでも文にならない。あきらめてカミさんに言い付けられた庭仕事をする。急にちいさまの話に聞いた口調が浮ぶ。見当つけて読むと文になる。中々一遍には読めない。字を睨んでいると段々分かってそれをノートする二回目に解答文を渡される。帰ってノットと読みくらべると苦心して読んだ所が合っていたり違っていたり。然し合っていた字も違っていた字も忘れない。その後次々に資料を頂き、その繰り返しをして行くうちに大分読める様になって来た。先生に色々御指導頂き、どうやら修了者になりました。  
さいわいな事に同好会が発足、この勉強を続けて行く事が出来ます。

## 〔群馬の古文書展〕

内田 太古庵  
木簡に始まり貴重な古文書がわかり良く公開され、良い勉強になりました。また、パンフレットも拝受いたしました。これも貴重な資料として活用させていただきます。

「群馬の古文書展」一回では内容が見きれないので、また、期間中に何回か拝見したいと思っております。

茅根 みゆき

群馬というところはなんのへんてつもないところだと思っただけ、このように展示されると、いろんな古文書なんかがあるのだなあ、と思いました。



